

子どもにとって影とは何か

——影の科学から影の物語へ——

Study on Children's Interest Concerning Shadows

安部 貴洋

要約 本研究では、影遊びに関する実践例をもとに、子どもにとって影とは何か、なぜ子どもは影に惹かれるのか、を考察している。

子どもが影に惹かれる理由のひとつは、影のもつ逆説性にある。逆説性とは「そこにあるのに、そこにはない」といった性質である。だが、影の魅力のひとつが逆説性にあるとすれば、一般に行なわれている科学的アプローチは果たして妥当であるのか。逆説性と科学とは相いれるものなのか。この問いに対して本研究では影の物語を提唱している。

1 影への問い

本論の目的は、子どもにとって影とは何かを考察することにある。もちろん、このような問いに正面から答えるだけの力量を論者は持ち合わせてはいない¹。論者にできることはせいぜい幼稚園、保育所で行われた影（遊び）に関するいくつかの実践例を通して、この問いを考察することである。その理由は主として論者自身にあるが、その他の問題としては影に対する全般的な意識の低さがある。例えば、松村佳子・石田智恵子は幼稚園教諭を対象に、「幼稚園で影を使った遊びをしたことがあるか」「その理由」「影遊びの内容」に関するアンケートを行っている²。幼稚園

教諭の31名から回答を得ているが、29名が「したことがある」と答えている。ただ、その理由としては①「影を使った遊びのおもしろさを体験してほしかった」(23名)、②「子どもが影に興味をもっていたから」(12名)、③「園の指導計画の中に組み入れられていたから」(2名)、④「その他」(4名)を挙げている。そして、遊びの内容に関しては影絵遊びや影ふみがほとんどであったという。この結果を見る限り、幼稚園において影が積極的に用いられているようには思えない³。松村と石田もまた次のように書いている。「幼稚園では影を使ったあそびが多く取り入れら

れ、楽しく遊んでいる様子が見えなくなる。しかし、影を作っている物体やその影の形を楽しむところに止まっており、光と影の関係にまでは及んでいない⁴。」確かに幼児教育の場において、影に対する子どもの興味をどう育てていくかは重要な問題である⁵。だが、そもそも子どもにとって影とは何か。なぜ子どもは影に惹かれるのか。これらの点を本論で

は考察したい。この問いは影へのアプローチを問い直すきっかけともなる。もちろん先にも述べたように、この問いに正面から答えることは論者の力量を超えている。そこで本論では愛知県岡崎市「岡崎市緑丘保育園」、愛知県名古屋市「風かおる丘幼稚園」における実践を手がかりに考察を行ってみたい。

2 実践にみる子どもと影

(1) 愛知県岡崎市「岡崎市緑丘保育園」

岡崎市緑丘保育園では、「先生ここにもこいのぼりがおよいでいるよ!」という5歳児の言葉をきっかけに実践が始まる⁶。保育者は「すごい!ほんとはね」と、子どもの言葉を共感的に受け止める。すると、このやりとりで気づいた他の子どもたちが「こいのぼり」の影を踏んだり、動くのを追いかけたりするようになる。また、自分の影に気づきウサギの真似を始めるようになる。その様子を見て他の子どもたちも、カニ、キツネ、グー・チョコキ・パーの影を作り始める。ここで保育者は影の位置がどのように変化するか見せるために、ポールの影の位置に青のリボンで目印をつけ、「どうなるかな?」と子どもたちに言葉をかける。昼食後、影の場所の変化に気づいた子どもが、大声で他の子どもに知らせる。降園前にも位置を確認しリボンをつける。影の長さにも気づき、保護者に伝えたりする。その後、園庭に「くい」を打ち日時計を作ったり、牛乳パックで日時計を作るようになる。また、それを見ていた3、4歳児も興味をもって眺めるようになる。これが実践の概要であ

る。

この実践に対して園では次のような考察を加えている。

生活や遊びの中で自然に目にする影を意識して見ることで、楽しく様々な発見をし、子どもと一緒に感動を味わうことができた。快晴の日に真っ黒にしっかりと映る影や曇りの日のボンヤリとした影など天気によっての影の色、影の長さ、角度による違いに気づき、変化を楽しむことができた。5歳児は自分の日時計を作り試したことでより関心が深まり、3、4歳児も興味が湧いたと考える。実践を通し、保育者の言葉かけ、かかわりから何気なく目にしている物が「楽しい」「面白い」につながるということがわかり、主体的なかかわりの大切さをより一層感じた。

岡崎市緑丘保育園では、子どもの言葉をきっかけに、影遊びが始まる。子どもたちの興味・関心を日時計づくりにまで展開し、異年齢の子どもたちを巻き込んだこの実践が優

れたものであることに疑いはない。ただ、ここで注意したいのは子どもの「先生ここにもこいのぼりがおよいでいるよ！」という言葉である。この言葉は何を意味しているのか。子どもは何に驚いているのか。さらに、子どもたちはこいのぼりの影を追いかけたり、影を踏んだりしている。また、ウサギ、カニ、キツネといった影遊びを行っている。子どもたちのこれらの行動は何を意味しているのか。このことが問われる必要がある。

（2）愛知県名古屋市「風かおる丘幼稚園」

風かおる丘幼稚園での実践もまた、子どもたちの影に対する疑問から始まる⁷。影ふみ遊びをしている最中に子どもは次のような言葉を発している。「あれ？影がないよ」「どこへ行っちゃったのかな？」「雲に隠れちゃったのかな？」「あっ、影が出てきた！」「どうして影が出てきたのかな？」「お日様が出て明るいからじゃない？」「太陽がないと影がなくて、太陽があると影があるんだ。」また、影で遊んでいる中、白いものの影も黒なのか白ではないのか、影の色について疑問を持ち始める。そこから黒、白、赤の画用紙の影を映してみる。どの画用紙の影も黒いことに気づくと、今度は白い紙にウサギの絵を描いて試してみる。画用紙の影が出来るばかりでウサギの影が出来ないことに疑問をもち、さらに色を塗ってみる。予想通りに、ウサギが映らないことに気づく。これが風かおる丘幼稚園の実践の概要である。

この実践に対して、次のような考察を加えている。

影で自由に遊ぶ子どもたちの疑問から始まったいろいろな場面設定では、予測する力が見られ、その予測に基づいて考え、さらに「～だったら」という想像に及ぶ繰り返しが見られ、科学する心を育てるフローチャートのパターンが起きていた。そして、四角の画用紙を持って色を調べている時に、紙の角度を変えると影が細くなることや地面に近づけると影が小さく、上にあげて遠ざけると影が大きくなることにも気付いた。

この実践では、影に対する子どもの様々な疑問が挙げられている。影がどこから来てどこに行くのか。太陽がないと影がないのか。そして、白いものの影も黒いのか。報告では最後の疑問に対する子どもたちの取り組みが紹介されている。子どもたちは影に対する自らの疑問を、様々な形で確かめようとしている。この一連の流れについて考察では「科学する心を育てるフローチャートのパターンが起きていた」と書いている。この実践も優れたものであることに疑いはない。ただ、科学する心を育てるといった方向以外の実践の可能性はないのか⁸。あるいは、影がどこから来てどこへ行くのかといった質問に対しては、どのように答えるのか。それらの点が問題として残ることになる。

3 子どもにとって影とは何か

これらの実践は、次の疑問を生じさせる。すなわち、「先生ここにもこいのぼりがおよいでいるよ!」という言葉に見られるように、子どもは影の何に驚いているのか、あるいは子どもは影の何に惹かれるのかといった疑問である。また、子どもたちはこいのぼりの影を追いかけ、踏んでみようとする。このとき子どもたちは一体何をしようとしているのか。影とは何か、影のどのような性質が子どもを惹きつけるのかが問われている。この問いに対して、レッジョ・エミリアのローリス・マラグツツイ⁹は「逆説性」と答える。逆説性は「あるけど、捕まえられない」「ひとつだけ、たくさんある」「夜の一部であるけれども、昼の一部でもある」といったように互いに矛盾する性質をともに含むことによって成立する¹⁰。「先生ここにもこいのぼりがおよいでいるよ!」という言葉は、「こいのぼり」と同じであるが異なるものである影についての驚きであり、「こいのぼり」を追いかけ、踏みつける子どもは、そこにあるのにない影の逆説性を確かめようとしている。また、ウサギ、キツネといった影絵を楽しむ子どもたちは、自分であるのに自分ではないものの感触を楽しんでいる¹¹。

だが、影のもつ逆説性が子どもを惹きつけているのだとすれば、果たして科学的なアプローチが妥当であるのかが問題になる。今後詳細な考察が必要となるが、逆説性と科学は果たして相いれるものなのか。この問題に関して、グイド・ペッテルは「この二重の性質のおかげで、影は、間違いなく子どもの（また大人の）想像力を刺激してくれますが、そ

れだけでなく、観察したり「理性」を働かせるための材料も十分に提供してくれます¹²」と説明している。ここでペッテルは、ふたつの実践の方向を示している。ひとつは観察や理性を働かせる方向への実践である。先のふたつの園はこの方向において実践を展開している。だが、先にも書いたように影が逆説性を特徴のひとつとするものであれば、そもそも科学と相いれるのか。少なくとも影を科学の対象としてのみ扱うことは影のもつ魅力を失わせることになるのではないか。この点、ペッテルはもうひとつの実践の可能性を示唆している。それは想像力をかきたてることである。このことは特別なことを言っているわけではない。これまでも影はさまざまな物語を生み出してきた。マラグツツイも「原始人にとって、影のイメージは伝説、すなわち靈魂、祭儀、妖怪変化、畏敬と畏怖についての物語の源泉¹³」となってきたと書いている。物語と影の逆説性の関係についてはさらなる考察を必要とするが、影の物語は科学とは異なる実践可能性を示唆している。今後、この方向での実践が必要であるように思われる。この点、レッジョ・エミリアの「影の物語」のプロジェクトが参考になる¹⁴。「影の物語」は影が生まれてから消えるまでの写真を子どもたちが撮影し、「影はまだ眠っている。だから窓のなかにいる。仲間のような、友達のような、あけぼのと一緒に、おひさまがやってくる。」といった言葉をつけるプロジェクトである。ここでは影の変化は誕生から死までの命の物語のとして語られている。そこには光と影といった科学的な要素のみならず、

美的なものとの関係も多分に含まれている¹⁵。

4 影の物語へ

本論では、岡崎市緑丘保育園、風かおる幼稚園の実践を手がかりに子どもにとって影とは何か、なぜ子どもは影に惹かれるのか、を考察してきた。マラグツイの言葉を借りれば、子どもは影の逆説性に魅了される。「ここにあるのにここにはない」といった性質こそが、子どもたちを惹きつけるのである。そして、子どもたちの影に対する興味・関心を育てるために両園では科学的な実践を展開している。それらは異年齢児までも巻き込み、また自らの問いに自ら答えるといった主体的な優れた実践となっている。だが、科学が影のもつ逆説性と果たして相いれるものなのか。

影に対する科学的アプローチは影の持つ魅力を失わせることになるのではないか。この点、ベッテルはもうひとつのアプローチの可能性を示唆していた。それは影が想像力をかき立てる点にある。影はこれまでも様々な物語を生み出してきた¹⁶。影に対する物語的なアプローチもまた今求められているのではないか。それは影のもつ逆説性をより魅力的な形で子どもたちに提示してくれるのではないか。影によって生み出された様々な物語をたどることから今後の幼児教育における影の可能性が開かれてくるように思える。

謝 辞

本研究は平成 25 年度八戸学院短期大学特別研究費を受けている。

¹ そもそも本研究のきっかけは平成 25 年度のゼミナール活動にある。平成 25 年度のゼミナール活動において「影とは何か」「影と文学」「影遊び」「幼児教育と影」等について調べたことが始まりである。

² 松村佳子・石田智恵子「子どもの影に対する興味・理解についての研究」、奈良教育大学教育学部附属教育実践研究指導センター『教育実践研究指導センター研究紀要』、vol. 9、2000 年、3 頁。この論文において松村、石田は遊びを「あそび」と表記しているが、本文では統一をはかるために引用以外は「遊び」と表記している。

³ 結論を得るためにはより詳細な調査を必要とするが、この傾向はかなり一般的なものであるように思われる。例えば、本学の学生（平成 24 年度入学）約 100 名に「幼稚園、保育所実習において影遊びを行ったか」というアンケートを行ったところ、「行った」と回答した学生が 10 名であり、そ

の内容は「影ふみ」がほとんどであった。それも意識的に行なったというよりも偶然行った場合がほとんどであった。

- ⁴ 松村・石田「子どもの影に対する興味・理解についての研究」、3頁。ただ、保育者向けの遊びの指導書には影に関して踏み込んだ目的を見ることが出来る。例えば、幼少年教育研究所編『新版 遊びの指導』（同文書院、2009年）では「影ふみ」と「影絵」が取り上げられているが、その「ねらい」をそれぞれ次のように書いている。まず、影ふみに関しては「① 光と影という自然の現象とその性質に気づき、興味を持って遊びに取り入れようとする。② 戸外でのびのびとからだを動かす。③ 遊びを工夫し、自らルールをつくってそれを守ろうとする。」（同書、142頁）また、影絵に関しては「① 自分のからだの影で遊ぶ。② 光源（太陽・電球等）の反対側に、影が映ることに気づく。③ 光の当て方によって、形が変化することに気づく。④ 簡単な影絵人形をつくり、お話影絵を演じて楽しむ。」（同上、144頁）
- ⁵ 一般に影とは、物体が光を遮ったため、光源と反対側にできる暗い部分と捉えられている。だが、影には日・月・灯火といった意味もまた含まれる。そもそも日本語の「カゲ」は光を表していた。だが、漢字の影響で光の当たらぬ部分も意味するようになったという。（増井金典『日本語源広辞典 [増補版]』、ミネルヴァ書房、2012年）
- ⁶ ソニー幼児教育支援プログラム『科学する心を育てる』、実践事例集 vol.7、2010年、4-5頁。（<http://www.sony-ef.or.jp/preschool/practice/vol7>）
- ⁷ ソニー教育財団幼児教育支援プログラム『見えた!? 科学する心 ウェブマガジン』、vol.126、2010年7月（<http://www.sony-ef.or.jp/preschool/webmagazine/webmag126.html>）
- ⁸ ただ、この実践は「科学する心を育てる」という趣旨のもとで行われている。
- ⁹ レッジョ・エミリア教育実践の創始者の一人。
- ¹⁰ レッジョ・チルドレン（著）・田辺敬子・木下龍太郎・辻昌宏・志茂こづえ（訳）『子どもたちの100の言葉 レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』、日東書院、2012年、174頁。この他に、子どもたちが影を好む理由として「明るさと暗さのどこか狭間にある世界の持つ魅力」（同上、173-4頁）を挙げている。
- ¹¹ この性質こそが影の豊さへとつながっているとグイド・ペッテルは書いている。「影のこの二重で矛盾した性質と、影は実物の世界と不確実性の世界の境界に横たわり、その両方に同時に属しているという事実が大きく支えられて、「影」は豊かな意味論的オーラを帯びた言葉として用いられてきました。」（同上、177頁。）
- ¹² 同上、178頁。
- ¹³ 同上、175頁。例えば、J・G・フレーザー（著）・吉岡晶子（訳）『図説 金枝篇（上）』（講談社学術文庫）が参考になる。
- ¹⁴ 「影の物語」の全文は次のようなものである。

午前10時20分

影はまだ眠っている。だから窓のなかにいる。仲間のような、友達のような、あけぼのと一緒に、おひさまがやってくる。

午前10時30分

今こそ、影がつくられるとき。それはまるで、日光のしずく。もうすぐ何かが起こる！

午前 10 時 32 分

影が開き始める。影さんは開こうともがいている。影さんをごんばらせているのはおひさま。おひさまの光に助けられて開く。

午前 10 時 42 分

今は、影さんはおひさまのかたまりのなかに入っている。全部の影がある。影さんはおひさまから太陽光線をいっぱい受けていて、影がいっぱい見える。

午前 11 時

今は、影さんは広く、低くなっている。それは最後の影。時間が過ぎると、違うものになる。それでも、同じもの。

午前 11 時 25 分

たそがれがやってくる。つまり、影さんは死んでいく。影さんは行ってしまう。そのとき、思い出も一緒に持っていく。

午前 11 時 30 分

四分が過ぎた。影さんは黒っぽくなってきて、消えてしまう。

影はまだ眠っている。

（『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、株式会社 ACCESS、2011 年、82-3 頁）

¹⁵ 同上、74 頁。

¹⁶ 例えば、次のようなものがある。梶井基次郎「K の昇天」（『檸檬』、新潮文庫）、シャミッソー（著）・池内紀（訳）『影をなくした男』（岩波文庫）、アンデルセン（著）・大畑末吉（訳）「影法師」（『アンデルセン童話集 3』、岩波文庫）、あまきみこ『ちいちゃんのかげおくり』（あかね書房、1982 年）、莊子（著）・福永光司・興膳弘（訳）「罔両」（『莊子 内編』、ちくま学芸文庫）、プレーズ・サンドラール（文）・マーシャ・ブラウン（絵）・尾上尚子（訳）『かげほっこ』（ほるぷ出版、1983 年）、アーシュラ・K. ル＝グイン（著）・清水真砂子（訳）『ゲド戦記』（岩波書店）

これらの作品に登場する影は多様であるが、「魂・生命としての影」、「もうひとりの自分としての影」、そしてそれらとは異なる影に分類することが出来るように思われる。まず、魂、生命と関わるものとしての影である。魂としての影を示しているのが、梶井基次郎「K 氏の昇天」、あまきみこ『ちいちゃんのかげおくり』である。これに対して、アンデルセン「影法師」、シャミッソー『影をなくした男』においては、影は対立すべきもうひとりの自分として書かれている。『ゲド戦記』もやや違和感はあるものの、この区分に属するものと思われる。そして、これらとは異なる影を示しているのが、サンドラール『影ほっこ』、莊子「罔両」である。サンドラールの『影ほっこ』はアフリカの口承文芸をもとに書かれているが、その中で影は精霊「影ほっこ」として書かれている。先の二つの影が、誰かの影であったとすれば、「影ほっこ」はあらゆるものの影であり、普段は森の中に住み、ときに応じて現われる独立した存在として描かれている。また、莊子「罔両」においては、人と影との間にあった明確な境界があいまいなものとして描かれている。言い換えれば、「罔両」では他の作品に見られたような確かな実体としての人もまた影と同様の存在として描かれている。

また、影と心の問題を論じたものとして、河合隼雄『影の現象学』（講談社学術文庫）がある。